

京鹿子

平成二十八年
通巻第九七号(毎月一回一日発行)



1月号

京鹿子祭特集号



鈴鹿呂仁

拾掬集 その四

時といふ出口に独り枯葉ふむ

一枚の枯葉のひかり風攫ふ

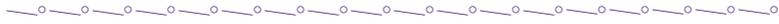
落日の語尾をのみこむ冬隣

冬めきて猫の利き手はしのび足

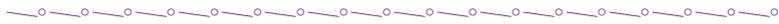
新海苔や東京湾に橋ふたつ

未枯るる庭師てこざる唐変木





梟の啼いて方寸疑はず
狸罨語部の継ぐ里の知恵
聞き耳は木々の密めき冬の鵙
紅葉狩燃える洛中洛外凶
ひとひらの紅葉いちまい月墓参
せせらぎの一語一音紅葉山
瑠璃光の零るきざはし紅葉寺
総門の天に瑕なし照紅葉



— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

雪もよひ

碧 雲 や 寺 紋 の 重 み 照 紅 葉

木 覆 に 京 の 反 り 橋 雪 も よ ひ

門 標 の 文 字 の 薄 ら ぎ 雪 の 雲

— 追 懐 — (その十七)

遊 禽 を 春 日 の 包 む 北 の 閣 (平成元年作)

除 幕 て ふ 沸 騰 点 の 小 春 山 (平成五年作)



— 近 詠 —

和田 照海

島の秋

石 鎚 へ ま づ 海 苔 網 の 錨 打 つ
ど の 島 も 海 苔 網 を 生 け 灘 良 夜
海 苔 畳 張 り 三 五 夜 の 月 上 る
廃 航 の 棧 橋 ひ と つ 島 の 秋
海 峡 は 青 き 渦 潮 鷹 渡 る



松本 鷹根

水澄めり

系露忌へ楠の大樹を仰ぐ道

末枯れの入江に鷺と思案佇ち

髭を剃る庭に小鳥の来る日差し

踏みしめて雨の落葉に何を問ふ

故郷に血縁絶えて水澄めり

近 詠



塩貝 朱千

花 柎

三方の瀬音重ねて楓朱に

花柎この世に生きて手を洗ふ

渡し跡の標あたらし文化の日

秋寒し魔女とゾンビに乗り合はす

霜月の眉太く描きレデイなり

英華採集

瓜坊の性善説に柵をする

福 山 亀 井 福 恵

瓜坊という可愛くてあどけない対象は、農作物を扱う人にとっては外敵となる害獣そのものである。人間に傾きがちな性善説をきっぱりと否定しなければならぬ作者にとっては、その現状は厳しいものに違いない。しかし、作者の優しさは下五の「柵をする」にある。

一村の改宗白き曼珠沙華

京 都 竹 内 久 子

一つの村に史実としての秘められた悲話がある。一村の改宗には迫害が付き纏うが、京都の松ヶ崎伝説は何度となく団結し立ち向かった、とされている。仏の導きとして置かれた季語の「白い曼珠沙華」。がそれを物語っているようだ。

遠こだまかえりは秋の声となる

長 岡 京 高 田 好 子

心の胸の奥深いところで繰り返し繰り返し妣の名を呼んだのであろうか？その声を聞いた山の神は山彦にそつと耳打ちをする。作者の願いは通じ、確かに作者の心の耳には届いたのだ。季語の「秋の声」は、遠いこだまのように作者の心の中で囁いている。



冬めく 藤岡 紫水

守り来しいのち一筋木の葉髪
綿虫の綿ふくらませ来る日暮れ
次郎柿色付く朝の陣太鼓
戻れば草吹く風も冬めける
山茶花や折々太き軒霰

葉膳 丸井 巴水

年輪を増やす古木が霧を舐む
赤き糸張り詰めしまま望の月
猫を抱く秋思のモデル影もたず
風涼し笑ひ涙を拭いてやる
葉膳のほどよき渋さ残る虫

伊藤 希眸

影動く度の重力簾古る
飯を炊く蟬は七日の露を吸ひ
川音の花街はしる初秋の灯
月替る秋霖といふ雨を招び
紅葉寒ねむり足りない眠り猫
そぞろ寒 北川 孝子

直江 裕子

コスモスの揺れて必死なのだと思ふ
来し方のささら解してゐる小春
秋空に知らない国が映りさう
大の字に真ん中さびし女郎蜘蛛
風くれば風に遊ばれ芋の露

京鹿子大賞受賞作品

京都市

片山 熙子

麦秋や跳んで少女の束ね髪

きのふ見てけふ見てあすも百日紅

麦笛の単調過去がやつて来る

空蟬にまだ眼光の残りけり

近くまで来たのでといふさくらんぼ

持ち札はクイーンばかり敬老日

尺蠖のなんて真面目な小枝ぶり

コスモスにコーヒーの香は強すぎる

待つことのまだ二つ三つ遠花火

青空にパンパスグラス天馬のやう

秋海棠どの花からも紅しづく

歳月をひとつに括りすがれ菊

釣瓶落しふつと消えたる人の影

流し雛青きしじまのひとところ

帯塚に風の執着 枯芙蓉

さざ波の広さを変へる春の風

この道にまだ奥のあり龍の玉

ほんたうはみんな淋しい春帽子

人違ひされお互ひに冬の鳥

春落葉音も立てずに美僧過ぐ

かさこそと生きて枯葉になつてゐる

深彫の天女の微笑リラの冷え

真つ白に始まる今年おそろしき

嘘のない空へ花びら往きたがる

冬木の芽しらず知らずといふこころ

コンパクト閉ぢれば散りしえごの花

風花やあるがままとは難しき

青胡桃峠の空が動き出す

散りぎはの椿の動悸伝はりて

まんぼうになりきつてゐる初夏の雲

京鹿子新賞受賞作品

兵庫 県

大政 睦子

街騒や黒南風といふ突き当たり

終章の秋薔薇ふたつ風に立つ

若葉風山へ山寄る旧街道

丸洗ひしたき心の磯涼み

老境とひらきなほれぬ花疲れ

不覚にも螢狩りとてついてゆき

一線を画す某女の春手套

看護師の尖つてゐる花の午後

すべすべのまるまるの播州大根

獅子の児のまたもよろめく秋祭り

必勝のはちまき二本衣紋竹

風に対き日照雨に光る濃あぢさゐ

一湾に秘密基地めく牡蠣筏

牡蠣棚を手繰れば海のこぼれ落つ

発想に逆転ありて年暮るる

捨ておかる蛸壺今朝の雨こぼす

初句会ひとりひとりの放電す

吹きあぐるものなきビルの虎落笛

鄙の地に鄙の掟や葛の花

霜柱蹠にある自己疎外

鶴引くや女の腕しまふもの

今われを叱る人なし萩ゆるる

直角に生き菜の花のつぼみ食む

切れ字なき二人暮しや冬日和

百方に陽炎の畏古戦場

飛べぬこと知るや駝鳥に冬の雨

論語塾子等の白靴一直線

肩馬の兎も結びたる初みくじ

京鹿子新賞受賞作品

岡山市

岸本 順子

式部の実柴垣あたりに陽の射して

武蔵野へ妣を慕ひて黄連雀

妣のことひとつふたつと実紫

堰音を越え来る風よ枯蘆原

木の実踏む良寛さまの寺に来て

夕さりてトレモ口哀し浜千鳥

そののちも紅葉かつ散る文殊堂

吉祥の色は何色餅の花

大仏様ほのと色めくもみぢ雨

子と孫もふえて十二支初詣

初詣孫へミニチュアランドセル

薔薇の昼シフォンケーキにローズティー

鬼やらひべそかく幼に鬼が泣く

翡翠や古刹に一瞬水の音

雪女夢の続きのあやふやに

縁日の冷し甘酒妣を恋ふ

梅三分表具師糊を練りはじむ

ほうたるや笛吹川に漫ろ雨

梅東風や蔵に潜みしヒストリー

海月来て浮棧橋の軋みをり

泡沫の恋とも知らず春の雪

雛僧やでで虫透けて角出せり

黒門を越えて来る風余花の風

忍者屋敷列の後ろに白日傘

花冷えや屋台に並ぶりんご飴

大団扇あふぎで忍者見習ひ中

百千鳥まだ濡れてゐる滑り台

モネの部屋出でもモネの未草

京鹿子新賞受賞作品

横浜市

佐藤みち子

薫風や三つ先まで青信号

てんとむし嬰に絵本の届きけり

あめんぼの雲をひと蹴り嬰一步

唇にはじめて触るる氷菓子

父の日や記憶の中の大きな手

土用芽やすり傷たえぬ嬰の膝

水面行く雲に遊べりみづすまし

秘め事の口を衝きさう柘榴の実

蛭や曾孫の顔を見せに行く

思ひ出の交差してゐる遠火花

廢坑の町に揺れゐる踊り笠

夕雲の日矢は八本実朝忌

嬰の声寢息に変はり虫の声

雪解けや一枝揺らし山揺らし

老眼に子等の文集秋の夜

赤鬼のよちよち歩き福は内

三日月に乗せれば嬰の眠るかな

春浅しどう歩いても床軋む

ふとん干す太陽こぼさぬやうに干す

御御御付少しうすめに朝桜

枯山を大きく割つて朝日さす

離れつつ会ひつつ揺らぐ花筏

落葉踏む音は父なり山羊ひいて

ふるさとの母等皆老い花大根

灯台の点滅へ舵年暮るる

折り紙の角折れば角春愁

お元日サーファーはもう波に乗る

百日の船旅に出るサンダラス

募集大作賞

枚方市

池永加代

頃あひ

春けらし遠山の梢むらさきに
先師なほ吾を励ます福寿草
秘めごとは懐紙にはさみ梅ふふむ
柿若葉頃あひと言ふ陽をもらふ
濃あぢさゐ齡の半分影にする
かやつり草闇来る前に濡れてゐる
あの頃の娘達は遠し錆夏炉

風やみて今微に入りし遠ひぐらし
山鳴動あらはを隠す黄葉紅葉
さざ波は風の足あと雁来月
秋蝶の過ぎ来し方や幾山河
風の秋葛の葉見せる二おもて
短日の積りて遠き昔かな
花柵鬼門は風の哭くところ
天上に宴あるらし牡丹雪

募集大作賞

鎌倉市

畑

佳与

境界

晩学の 一知一忘 日脚伸ぶ
投函の にぶき音して 春うごく
にんげんの つくる境界 鳥帰る
春閑く やどこかうそぶく 写楽の絵
藪椿おもた きまでの 眠さかな
七夕や あの日から 買ふ白髪染め
昼寝覚め 虚空に からだ置き忘れ

雲の峰 真白き産着 干されゐて
をんをんと 雲ひとつ なき炎天下
つまづきしもの 見当らず 木下闇
張り紙の 上に張り紙 秋暑し
暑気 払ひ香辛料は 目分量
秋思ふと 瞼のふちにとどまりぬ
抽斗に 母の残葉 ちちろ虫
海昏れて ぶんはりと月ありにけり

双滴賞受賞作品

呂 仁 三 賞

雪積むにまかせ明日を白紙とす

亀井 福恵

身中の時計を外すおぼろの夜

瀬尾千鶴枝

白桃のつかみどころのなき不安

菊池 和子

仁 三 賞

命とは白にはじまる七変化

西村 滋子

陽へ向きし向日葵の裏見て暮らす

吉村紀代子

子供等としやがんで蟻の国に居る

荒田 義枝



双滴賞

受賞作品

京都商工会議所会頭賞

京都市 仲井タミ江

子の息に母が吹きたす紙風船

京都芸術文化協会理事長賞

名張市 松田 庸子

母となり母の日に行く里ふたつ

読売新聞社賞

紀の川市 宇田 篤子

退屈の転がつてゐるかりんの実

京都府知事賞

京都市 村田あを衣

花吹雪抜けきるまでは母とゐる

京都市長賞

東京都 福島 照子

青瓢少しいびつが生き易い



毎日新聞社賞

吹田市 吉田 孝江

何となくゴリラに逢ひたくなる春愁

朝日新聞社賞

高槻市 猪頭 幸子

定位置に夫ある安堵花は葉に

KBS京都賞

京田辺市 山中志津子

和すときも離るる時もさくらかな

NHK京都放送局長賞

福知山市 芦田千代子

田草取り両手で地球かきまぜる

京鹿子祭賞

京都氏 吉岡 渥子

百論に結論一つ髪洗ふ

京鹿子祭賞

奈良市 亀澤ちず子

ひがん花真赤な帯となる棚田

京鹿子祭賞

京都市 寺石恵美子

捨てるもの捨てて孕寿や竹の秋

双滴賞

京都市 山田 和

さやけしや切り口揃ふ和紙千枚

双滴賞

南丹市 小島須磨子

青梅落つ予備の釦のある安堵

双滴賞

福山市 平田 啓子

どの路地も海へと抜ける島の朱夏



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

瓜坊の性善説に柵をする

福山 亀井 福恵

白芙蓉ひとり寡黙をとほすなり

昆陽の置き土産なり甘藷畑

間引菜の色に出でたる土の神

さつまいも丸腰のまま織部皿

アリゾナ 伊吹 之博

寄り道も自習のひとつ祭笛

一村の改宗白き曼殊沙華

京都 竹内 久子

鴟日和大黒天へ男坂

地藏盆感謝のたすき次世代へ

木洩れ日の山の匂ひや野分あと

花水木みどりの芝に散りて尚

オハイオ 水谷 直子

大杉の高きに幣や星涼し

遠こだまかへりは秋の声となる

長岡京 高田 好子

そぞろ寒指一本で弾くピアノ

秋の蚊や唯とんでゆく声もなく
夏深し庭の芝生も色あせて